八丈方言の諸相　古層から独自の変化まで

中日理論言語学研究会(大阪梅田)　2011/07/03
金田章宏（千葉大学)

０．はじめに

2009 年 2 月、朝日新聞夕刊の一面トップにおどった見出しは「八丈語？」だった。ユネスコ(国連教育科学文化機関)が「世界で約二千五百の言語が消滅の危機にさらされている」として、日本では以前からリストにあったアイヌ語に、琉球諸方言の六「言語」と「八丈語(青ヶ島をふくむ)」を追加し、計 8「言語」としたのである。

一般に日本国内にある言語は、日本語とその諸方言のほかにはアイヌ語のみとされているが、ユネスコは日本でのそうした「常識」をふまえたうえで「国際的な基準だと独立の言語と扱うのが妥当と考えた」のだという。

一方、パリにいたのがたまたま文化系の記者だったという理由で三大紙で唯一このニュースをとりあげた朝日新聞は、もしも追加されたのが琉球諸方言だけだったら、おそらく記事にしなかったのではないか、とは在京記者。「八丈語」がふくまれていた意味は相当に大きかったといえる。

八丈方言は万葉集東歌の文法現象を色濃く受け継ぐ方言として知られる。この方言は日本列島の太い幹に接ぎ木したような存在であり、内容的にも隣接する方言がほとんどみられない。ここでは八丈方言(おもに坂下の三根(みつね)地区)の、東歌・防人歌につながる文法現象や古代中央語にみられる文法現象、独自に獲得した文法現象について概観する。なお、万葉集の訓読等には『新日本古典文学大系』(岩波書店)を使用した。

１．八丈方言の古層

１．１　上代東国方言との比較

１．１．１　形容詞のエ段連体形

中央語の形容詞連体形はたとえば「高き山」のようにイ段の「き」で名詞につづく。これが東国方言ではタカケ山のようにエ段となる。

○4369　筑波嶺のさ百合(ゆる)の花の夜床(ゆとこ)にも　かなしけ(可奈之家)妹そ　昼もかなしけ(可奈之祁)
○3557　悩ましけ(奈夜麻思家)人妻かもよ　漕ぐ舟の忘れはせなな　いや思ひ増すに
○3483　昼解けば解けなへ紐の　わが背なに相寄るとかも　夜解けやすけ(等家也須家)

八丈方言の例をみてみよう。形容詞の連体形は八丈方言でも同様にエ段であらわれる。

○ナカカラワ　スバラシケ　タクマシケ　オノコゴノコガ　ウマレテ　キトーデ(中からはすばらしい、たくましい男の子が生まれてきたので：民話・桃太郎)
○コノヒニャ　モー　ワカケ　ヒトモ　トショリモ　ミンナガ　ガッコノ　ニャーイ　デテ　ヤスモヒデ(この日にはもう、若い人も年寄りも、みんなが学校の庭へいって休む日で：談話)
○ネッコケ　トキニワ　カサネギョ　セーテ　ボウク　ナロシャン　タケノ　カワ(小さいときには重ね着をさせて、大きくなるにつれて竹の皮のように：しょめ節)

この連体形に終助辞ワがついて融合したタカキャ(高いよ)や、そのまま終助辞ジャがついたタカケジャ(高いねえ)などが終止形として使用される。叙述終止形ではこれらの終助辞が義務的である。はじめの例ショッキャは、*シロシ(著し・白し)の連体形*シロケがショケに変化し、ワが融合したものである。

○ンーガ　オヤガ　ショッキャ。((そのことは)おまえの親が知っているよ。：談話・中之郷)
○ソゴンダーバ　ノウ　イッテモ　ヨケジャ。(そうならね、(そこへ嫁に)行っても いいよ。：民話・吉浦の波)
○コノコワ　オウシジャ　ナッキャ。(この子は唖じゃないよ。：民話・吉浦の波)

１．１．２　動詞のオ段連体

動詞の連体形では、中央語の動詞はたとえば「降る雪」のようにウ段で名詞につづく。これが東国方言ではフロ雪のようにオ段になる。

○3423　上野(かみつけの)伊香保の嶺ろに降ろ(布路)雪(よき)の 行き過ぎかてぬ 妹が家のあたり
○4385　行こ(由古)先に波なとゑらひ 後方(しるへ)には子をと妻をと置きてとも来ぬ
○3414　伊香保ろの八尺(やさか)のゐでに立つ虹(のじ)の現はろ(安良波路)までも さ寝をさ寝てば

八丈方言でも同様に動詞の連体形はオ段であらわれる。

○ソコノ　ヒャクショウイッサンデ　ソノコウ　サガソ　コトン　ナララッテイガ (そこの村人みんなでその子をさがすことになったそうだが：民話・てごめ)
○ムチューン　ナッテ　オロ　マン　ヒョウラドキガ　ヒッツギトーデ(夢中になって織るあいだに、お昼時がすぎてしまったので：民話・七夕さま)
○モッテ　イコ　オボンニ　ノセトッテイ　ヒョ　ツケテ　ヤケバ(持っていくお盆にのせてから、火をつけて焼けば：民話・人捨て穴)

形容詞と同様、この連体形に終助辞ワやジャなどがつくと終止形になる。はじめの例で、直訳で「行くよ」にすると未来テンスになるのだが、つぎの例とおなじく現在テンスの意味で使用されている。この方言のアスペクトに関してはあとでふれる。

○ケイワ　ドコソコドンネイノ　ナヌカデ　テラメーリン　イコワ。(きょうはどこそこ殿の家の七日で、寺参りに行くところだよ。：民話・水守)
○ハルガ　キタロウ　ショクナク　アリャリャ　ナイテ　ツゲロジャ　ウグユスガ(春が来たのを知らないでいたら、鳴いて告げるねえ、ウグイスが：春山節)

なお、つぎの例などは一見ふつうのウ段おわりにもみえるが、連体形はチガヲがチゴヲに変化し、さらにその owo が ou に変化したものであって、もとはほかと同様オ段おわりである。ツコウ(使う)、ウトウ(歌う)、ワロウ(笑う)などもこれとおなじであるが、これらの～シテのかたちはチゴッテではなくチガッテやツカッテなので、連体形末の母音オがまえの母音に影響(逆行同化)して awo を owo に変えたものとみられる。同様の現象はあとの推量形にもみられる。

○ウクワ　ココトワ　カクガ　チゴウ　シケイガ　タカケ　イェドーテ(あそこは、こことは格が違う、敷居が高い家だから：民話・吉浦の波)

ここで終止形と連体形の語形をみてみよう。日本語諸方言のほぼすべてで、この 2 形は「飲む。」「飲む人」のようにおなじかたちになっているが、もともとは連用形「飲み」に古い終止用法があり、連体形は「飲む」で、かたちが別だったとされている。そのなごりは存在動詞の終止形「あり」と連体形「ある」などにみられるが、存在動詞以外ではその違いがなくなっている。

一方、八丈方言では、ふつうに使用される終止形(ノモワ、ミロワ)は連体形(ノモ、ミロ)をもとに終助辞ワなどをつけてつくられるので、その意味ではおなじかたちなのだが、推量形ノムノウワ(飲むだろう)や条件形ノムネーヤ(飲んでいると)のなかに古い終止形のなごりのノムがみられる。ただし弱変化動詞(ミノウワ(見るだろう)、ミネーヤ(見ていると))では連用形をもとにしていて、中央語の古い終止用法である可能性を考えてもよいだろう。なお、伝聞形では強変化動詞はノムテイヤ(飲むそうだ)でこれらとおなじだが、弱変化ではまたべつの接続でミルテイヤ(見るそうだ)になっている。こうして八丈方言では、中央語とは別の対応関係で、終止形と連体形がかつては別のかたちだったことが推測できるのである。この問題についてはまたあとでふれたい。

１．１．３　動詞のノマロ形

これは本動詞「飲む」と補助動詞「あり」の組み合わせである「飲みあり」の連体形「飲みある」に対応する語形であるが、ここにはふたつの現象がふくまれる。ひとつは動詞のオ連体とおなじもので、補助動詞「あり」の連体形「ある」がオ段のアロとなる現象である。もうひとつは、「飲みある」が融合して、中央語で「飲める」とエ段になるところを、飲マロとア段になる現象である。

○3469　夕占(ゆふけ)にも今夜(こよひ)と告らろ(乃良路)我が背なは　あぜそも今夜よしろ来まさぬ
○3546　青柳のはらろ(波良路)川門に汝を待つと　清水(せみど)は汲まず　立ち処(ど)平(なら)すも

八丈方言のなかでも高齢層が使用するより古い方言では、強変化動詞(四段活用)では飲マロ、弱変化動詞(一段活用)ではテをふくむ見タロが連体形としてそのまま使用されたが、現代方言では r が脱落して、(t)aro＞(t)ao＞(t)oːのように融合した飲モー、見トーが使用される。しかし、この連体形をもとにした過去の終止形では融合せず、飲マロ、見タロに終助辞ワが融合して飲マラ(飲んだよ)、見タラ(見たよ)となる。ただし、～ジャ形は飲モージャ、見トージャ。八丈方言のこのかたちは主として過去、ときに現在の結果の状態の意味で使用される。

なお、以下に三根地区以外の例がでてくるが、二重母音や長母音は地区ごとに規則的な対応関係があって三根地区とは別の母音であらわれる。したがって、融合などの内容が該当するのはあくまで三根地区についてである。

○ゴジューニ　ナロー(＜ナラロ＜*ナリアロ)　オヨー　ブッチャリキラズン(五十歳になった親を捨てきれずに：民話・人捨て穴)
○ンーマソウニ　ウモー(＜ウマロ)　モモガ　ナガレテ　クルテイテ(うまそうに熟んだモモが流れてくるそうで：民話・桃太郎)
○オニメガ　ツメデ　カコー(＜カカロ)　イシノ　アトガ　マンデモ　シローク　ノコッテ　アロガ(鬼の爪でかいた石のあとが、いまでも白く残っているが：民話・桃太郎)
○ワガ　オッカサンラガ　ハナシイテータラ。(＜*ハナシイタシタロワ)(私のお母さんたちが(そんなふうに)話しましたよ。：談話)
○カビァヨワ　ツブリン　ノセテ　ササガラ。(桑の葉をは頭にのせてはこんだよ。：談話・中之郷)
○アー　ホントー　ソガンダー　コトガ　アララ　ナー。(ああ、本当、そのようなことがあったねえ。：談話・末吉)

中央語では弱変化動詞は「見たり」のようにテをふくむが、八丈方言でも弱変化動詞は見タロ＜*見テアロ、寝タロ＜*寝テアロのようにテが義務的である。ただし、中央語に「着ある」「来ある」がケルであらわれる例がわずかにみられるし、東国方言でも着アル＞カルなどの例がある。上代は弱変化動詞のリ形がほぼ消滅し、強変化動詞でリ形とタリ形が共存した時代だったのだろう。中古になると強変化動詞でもリ形が消滅する。歌番号のあとのカッコは巻数。

○3667(15)　わが旅は久しくあらし　この我(あ)が着る(家流)妹が衣の垢つく見れば
○3125(12)　ひさかたの雨の降る日を　わが門に蓑笠着ずて来る(来有)人や　誰
○3957(17)　(略)見まく欲り　思ふ間(あひだ)に　玉梓の　使ひの来れば(家礼婆)　嬉しみと　我(あ)が待ち問ふに(略)
○4431　笹が葉のさやぐ霜夜に　七重着る(加流)衣に増せる　子ろが肌はも
○4388　旅とへど真旅になりぬ　家の妹が着せし衣に　垢付きにかり(都枳尓迦理)

■つけたし■

八丈方言のがわから東国方言(のとくによみ)をみていると、いくつか疑問に思えることがある。歌を記録したのがおそらく中央からやってきた役人など、識字能力のある人たちであったために、中央語寄りの表記(オ段であるべきところをウ段)にしてしまった可能性が高いのではないか、と思われる箇所が多数みられる。動詞型連体形が～O となるのが東国方言の文法の一部であるとすれば、ノマロ形、推量のナモやモだけでなく、完了のヌ、否定のヌとされていたものも、たんなる東国なまりなどでなく文法レベルでノであった可能性が高いのである。

さらに、難解歌のひとつとされている東歌 3450 の「可知馬利」も、一般になんの疑問もなくカチメリとよまれているようだが、このメリが推量でミアリに由来するなら、東国方言のほかの例と同様、マリとよまれてもよい。「馬」のよみも東歌以外でもマ、メともにあるので、メでなければならない理由はないし、東国方言であることを考慮すればなおのこと、カリマリとよむ妥当性は高くなる。

○3450 乎久佐乎等 乎具佐受家乎等 斯抱布祢乃 那良敝弖美礼婆 乎具佐可知馬利
　　をくさをと をぐさずけをと しほふねの ならべてみれば をぐさかちめり

ところで、この方言でもふつう、動詞にアリのつかない語形(以下、非アリ形とよぶ)は非過去(基本的には未来)をあらわし、アリの融合した語形(以下、アリ形とよぶ)は過去をあらわす。しかし、あとで過去のキのところでもふれるが、この方言ではまだ古代語的なアスペクト・テンスを保存していて、非アリ形が現在進行中の動作や変化、アリ形が現在の結果の状態をあらわすことがある。

その典型が感嘆文における詠嘆の用法である。アリのつかない飲モとアリの融合した飲マロは、それぞれ詠嘆のヲが融合した語形、飲モウ(＜*ノモヲ)、飲マロウ(*ノマロヲ＜*ノミアロヲ)がいわゆる感嘆文に使用され、目の前における動作や変化の進行(ノモウ)、動作や変化の結果の状態(ノマロウ)をあらわす。八丈方言のこの用法は、アリの有無による現在の進行と結果という、古代語のアスペクト現象にきわめて近いといえる。この点については再度とりあげる。

なお、連体形にこの飲モウと似た飲モーがあったが、この方言(三根地区)では長い母音のオウとオー、エイとエーを明確に区別する。たとえば、コウ(子を)、コー(川)、ヘイ(塀)、ヘー(ハエ)のように。

○バー　コラ　ノモウ！(まあ、この人飲んでいる！)動作の進行
○コラ　コーコウ！(これ乾きかけている！)変化の進行
○バー　コラ　ノマロウ！(まあ、この人飲んでいる！)動作の結果の状態：顔が赤い、ビンが空になっているなど。現在は飲んでいない。

○ハー　コーカロウ！(もう乾いている！)変化の結果の状態

１．１．４　推量のナモ

古代中央語では推量をあらわすのに「む、らむ」という要素が使用されるが、東歌ではそれがモ、ナモのように、動詞連体形とおなじオ段であらわれ、かつ、ラがナであらわれる。万葉集の例には八丈方言と直接かかわるナモだけをあげる。

○3476　うべ児なは我(わぬ)に恋ふなも(故布奈毛) 立と月(つく)ののがなへ行けば恋ふしかるなも(故布思可流奈母)
○3563　比多潟(ひたがた)の磯のわかめの立ち乱え 我(わ)をか待つなも(麻都那毛)昨夜(きそ)も今夜(こよひ)も

八丈方言ではこのナモに由来する要素が推量形のもとになっている。さきに動詞チガヲがチゴヲになってから融合してチゴウになる例をあげたが、ここでも同様にナモがノモに変化してから融合し、ノウになっている。awo や amo が a＊o＞o＊o＞ou になるという共通の変化がおこったといえる。

○モモカー　ウマレトーテ　アダン　モモタロウテ　ヨ　ナガ　イチバン　ヨカンノウワ　ノー。(モモから生まれたから、やっぱり、桃太郎という名がいちばんいいだろうね。：民話・桃太郎)
○ムカシワ　イチバン　ニギヤカダランノウワ。(むかしはいちばんにぎやかだったと思うよ。：談話)
○ハヤ　ジューネングレーニワ　ナルナオワ　タテテ。(もう 10 年ぐらいにはなるだろうよ、(社を)たてて。：談話・青ヶ島)
○ハー　コイデ　ヨカンノウジャ。(もう、これでいいだろう。：民話・欠け皿)

１．１．５　語彙について

語彙の点で興味深いのが、名詞ホホ(頬)にかかわる動詞ホホムである。＜蕾や芽がふくらむ＞という意味のフフムは万葉集では中央語を中心に十数例みられるが、ホホムは東国方言に１例あるのみで、記紀歌謡にはいずれもみえない。その後の平安前期の辞書『新撰字鏡』には保々牟(ホホム)がみえる。

○4077(18)　わが背子が古き垣内(かきつ)の桜花いまだ含(ふふ)めり(敷布売利)一目見に来ね
○3572　あど思へか阿自久麻山のゆづるはの含(ふふ)まる(布敷麻留)時に風吹かずかも
○4387　千葉の野(ぬ)の児手柏(このてかしは)の含(ほほ)まれど(保々麻例等)あやにかなしみおきてたかきぬ

さいごのホホマレド(＜ほほみあれど。八丈方言ではホウマイドウ)は、東国方言についての理解が国語学､日本語学の世界でもそれほど定着していないせいか､『日本国語大辞典』ではこの語形を「自ラ四」、つまり、ホホムとアリとが融合したホホメリの東国方言形ではなく、ア段であることにひっぱられてラ行四段活用の自動詞としてしまっている。(フラルやハラロは「連語」としている。)

八丈方言ではホホムから直接に変化したホウム(自分で口にふくむ)、ホウメル(ほかの人の口にふくませる)が使用される。意味の点でも、万葉以前の出発点的な具体動作の段階をたもっているといえる。

○アイモ　ホウモウ。(私も(口に)ふくもう。)
○クチイッペー　ホウドッテイ　ハナソドーテ　ワカリンノージャ。(口いっぱいにふくんで話すもんだから、(言っていることが)わからないねえ。)
○カラス　カラス　カンネンボウ　ナレガ　コウワ　トンデーテ　ミソウ　ヤッテ　ホウメテ　カゴヤ

ガ　ニャーイー　ブッチャッタ(カラス、カラス、おまえの子をは取り出して、味噌をやって(口に)ふくませて、籠屋の庭にすてた：わらべ歌)

以上、万葉集のなかの東歌と防人歌にみられる上代東国方言と八丈方言のおもな類似点についてみてきた。奈良時代の畿内と関東との関係は、弥生系渡来人たちがその勢力を東に広げようとしているなかにあって、弥生化のもっとも進んだ畿内と、その勢力範囲内にありながらも弥生化のもっとも進んでいなかった関東ととらえことができる。当然そこには、渡来系の民族がもっていた言語の影響の濃淡差がありうるわけで、裏を返せばそれは日本列島に存在したいくつかの縄文系民族がもっていた言語の保存の濃淡差でもある。このようなことから、東歌や防人歌の言語現象を色濃く保存する八丈方言は、文献から確認できるかぎりにおいて、日本列島のもっとも古い言語のすがたをとどめている可能性があるといえる。

１．２　上代・中古語との比較

１．２．１　過去の「き」をもつ語形

中央では鎌倉時代になると過去の「き」が衰退していくが、それに呼応するように、現在テンスにかかわっていた「飲みたる」が「飲んだる」から「飲んだ」になって現在テンス離れをおこし、過去の「き」にとってかわる。(鎌倉からの数百年はテンス・アスペクト体系の一大転換期)

すでにふれたように八丈方言の非アリ形、アリ形が＜現在の動作や変化の進行＞と＜現在の結果の状態＞をあらわすことができたのは、もともと過去の意味をになっていた「き」がかろうじて生きていたからである。

○キョネン　オトトシャ　オドラッチ(＜*オドリアリシ)　サマモ　イマジャ　トウロウノ　フサトナリ(去年おととしは(元気に)踊ったあの方も、いまでは(亡くなって)灯籠の房になってしまった：民謡・しょめ節)

○ナブレ　カクレニ　オジャラッチ(＜*オジャリアリシ)　サマモ　イマジャ　アシダデ　チョウチンデ(こっそり隠れながら(私のもとに)かよっていらっしゃったあの方も、いまでは(堂々と)足駄をはいて、提灯を提げて：民謡・しょめ節)

○ホウジガ(＜*ホホミシガ)。((口に)ふくんだっけなあ。)

ここで八丈方言と古代語の時間表現を比較してみよう。かたちをそろえるために連体形でしめす。八丈方言の「ノモウ」が意志勧誘にのみ使用されることをのぞけば、まったくおなじであることがわかるだろう。このように八丈方言は古代語の時間表現システムを、部分的であるとはいえ少なくとも形態的にはそのまま保持しているといえる。

八丈方言

未来	現在		過去
(ノモウ) (意志推量)	進行	結果	ノンジ
	ノモ	ノマロ	

古代語

未来	現在		過去
のまむ	進行	結果	のみし
	のむ	のめる	

１．２．２　強調と疑問の係り結び

八丈方言にはコソに由来する強調の係り結びと、カに由来する疑問の係り結びが存在する。

コソに由来する強調の係り結びには、コソハが融合したとみられるカによるもの(はじめの 3 例)と、さらにそれにハの融合したコー(地区によってはコア、カー)によるもの(あとの 1 例)との二種類がある。これらによって強調されると、古代語同様、述語はいわゆる已然形になる。方言話者にはほとんど意識されないようだが、後者コーのほうがより強調が強いようで、結びにはノダのような意味の指定ナリの已然形ナレが変化した、ネー(地区によってはネァ)が義務的である。

○ワリャナ　オメイヤカ　タレドノ　スナヲ　トリテ　オガメガ　カミガミニ(わたしは(あなたを)思っているからコソ、垂土(地名)の砂を取ってきて拝むのです、神々に：しょめ節)

○タケボーキデカ　アラレ。タケデカ　カコァダレ。((むかしの箒は)竹箒でコソあったよ。竹でコソ掃いたんだよ。：談話・中之郷)

○ジブンノ　ウチデカ　ワケーテ　ハイレガ。(自分の家でコソ(風呂を)沸かして入るよ。＝自分の家でしか入らないよ。：談話・青ヶ島)

○ソノ　イトーコア　ネングニ　オサメタンネァ。(その糸をコソ年貢に納めたんだよ。：談話・中之郷)

カに由来する疑問の係り結びは、たずねではあるのだが、～カナアという自問的な用法がふつうのようである。結びには推量のナモ(の変化形)が義務的である。

○ケイワ　ミンナ　ソロッテ　ドケイカ　デカケヤルノウテ　ユト(きょうはみんなそろって、どこへでかけなさるのかな、というと：民話・水守)･･･たずね

○チャカレタ　ナナチャノ　カケラヲ　ホレイ　ツキカ　スノウト　ノセテ　ミル(割れた飯茶碗のかけらをひろい、くっつくかなあと、のせてみる：しょめ節) ･･･自問

○コノ　カケザラワ　アニョカ　オスナルノウ。(この欠け皿は(まったく！)なにを言ってるんだろう。：民話・欠け皿) ･･･反語

１．２．３　否定形にみられる「ず」以前の形態

古代語の否定「ず」は奈良時代にはすでに「ず」であり、おなじ否定系列である「ぬ」や「ね」と子音が異なっていた。これについては、ごくわずかな例から「にす」が変化したものである可能性が指摘されているが、推測の域をでるものではない。一方で、八丈方言の否定過去断定形や否定非過去推量形には「ず」以前の姿がたもたれている可能性がある。否定の要素はもともとナ・ニ・ヌ・ネのように「ふつうに」変化したとみられるが、その連用形ニとサ変動詞スの連用形からなるニシをふくむ語形がそれである。つぎのはじめの例は、動詞連用形イェミ(笑み＝口を開く・割れること)＋ニシ＋アル＋推量ナモ＋終助辞ジャ(＜*ニテハ)が変化したものである。これが正しければ、この方言の否定形は、すでに「ず」になっていた奈良時代の奈良以前の姿をたもっていることになる。

○コレガ　コーベワ　マダ　イェミンジャンナオジャ(＜*イェミニシアルナモニテワ)？(これ(椿の実)の皮はまだ割れないだろう？：談話・青ヶ島)

○フロイッペーノ　ミズー　タミーシャーテワ　ホントーン　ナナタビモ　トータビモ　イカズニワ　フロイッペーノ　ミズワ　タマリンジャララ(＜*タマリニシアリアロワ)。(風呂いっぱいの水をためようとしては、本当に、7 回も 10 回も(水汲みに)行かなくては、風呂いっぱいの水はたまらなかったよ。：談話・末吉)

これらの語形のニシ以下の部分については無理のない変化である。しかし、その接続、つまり中央語をふくむ日本語諸方言で、否定形はすべてノマ・ナイのように未然形接続となっているのに対し、この方言でイェミ、タマリと連用形に接続しているという点、接続一般としては連用接続が基本であるとはいえ、今後解決しなければならない問題である(小林 2004)。

１．２．４　そのた

このほかに、連用形の終止用法、古風な敬語体系、条件形の～eba と～aba、一人称代名詞のア系(個にかかわる)とワ系(イエにかかわる)、といった古い文法現象が存在する。

とくに敬語では、勧誘形に標準語のような謙譲語ではなく尊敬語を使用(オジャロゴン・カキヤロゴン)したり、ミウチについても目上であればヨソに対して尊敬語を使用(絶対敬語)したりするが、こうした現象は琉球西表方言にもみられる。

このほか、語彙では、タコウナ(たけのこ：たかむな)、トンメテ(つとめて　西表ではシトゥンタ)などの古語、音声・音韻では、オウシ(唖：おふし)、フンドウシ(褌：踏み通し)など縮約以前の音や、カシク(かしぐ(室町まで、かしく)：炊ぐ、蒸す)、ヘイラク(ひびらく(室町まで、ひひらく)：疼く)など濁音化以前の清音がみられる。

２．八丈方言における独自の変化

２．１　格の二重表示

全体と部分や持ち主と持ち物をあらわす「ゾウは鼻が長い」のような文は二重主語などといわれることがある。しかし、これはあくまでも「ゾウは」が主語で、「鼻が長い」全体が述語である。「鼻が」は述語節のなかの主語であって、「ゾウは長い」ではない。「彼は足が短い」と「彼は短足だ」とを比較すれば、その違いがわかるだろう。むしろ、「今、アデン湾で何か重大なことが起きている」「なに変なもの食べてんの！？」(不定詞、疑問詞の共存)、「家の間取り作成フリーソフト、いいのがあるのね」「ゆかた新しいのを買おう」(規定語の倒置)(以上、web 検索より)などのほうが、二重格的ではある。

一方、この方言にはまさに主語をふたつもつ構文がある。たとえば、「ゾウのは鼻が長い」のような文である。「ゾウの」とは「鼻」のことであり、どちらも「長い」の主語になっている。

つぎのはじめの例は、一人残された継子を友だちが七夕の祭りに誘いにくる場面である。ワゴーはワガハの融合形で「私のは」であり、「私のはない」は着物自体をさしているので、「着物はない」とおなじで意味である。標準語なら「私は着物が」としなければならないが、これだと「私は」が主語＝主題になり、この方言のようにとりたて性を明示できない。こうした現象は、主語だけでなく＜～を＞、＜～に＞など補語にもみられる。2 番目の例は三重表示になっていて、ほかの人のではなく、ほかの畑のではなく、のようにやはり対比的に使用されている。

○アダン　ワゴー　キテ　デロ　マダラガ　ナクテ　ノーテ　ユト(だって、私のは着ていく晴れ着がなくてねえ、というと：民話・欠け皿)

○クマチャンゴー　カンドノガノ　イモガ　ンーマキャ。(熊ちゃん(人名)のはカンド(畑のある地名)のがサトイモがおいしい。)

２．２　格の明示の厳格化

標準語で名詞の主格や対格は「ネコがいる。」「チーズを食べる。」のように～ガ、～ヲのかたちでしめされる。古代語では基本的に名詞になにもつかないハダカのかたちが主格にも対格にも使用されたが、それが次第にガやヲのかたちで格を明示するようになった。しかし、ガやヲにハやモがつくと、「ネコはいる。」「チーズもたべる。」のようにガやヲはきえてしまう。したがって、「ネズミは食べた。」だけだと、ネズミが動作主体なのか動作対象なのかはわからない。

八丈方言では原則としてハやモがついても、対格は対格であることを明示しなければならないし、主格でも一部そうである。主格と対格をハダカのままで形式的に区別しない古代語のような言語タイプから、両方にそれぞれべつの印をつけて、標準語以上に(必要以上に？)はっきりと区別しわける言語タイプへと変化したことになる。

○アダン　ワレイワ　ワガ　ホーガ　コノ　タブー　ツメデ　シギッテ　ヒジノコデ　スリムクッテ　タナバタサマン　ニテ　オガメ　ヨウテ　オシャローテ(だって、私をは私のおかあさんが、この稲を爪でむしりとって、肘ですりむいて、七夕さまに炊いて供えなさいよ、とおっしゃったから：民話・欠け皿)

○コンド　オヤヒネコヒネン　マガリクネロー　クダゲー　コイゲー　イトウ　トウイーテ　モッテ　コーテ　ヨ　フレガ　モールト　ノウ　ソレイモ　ソノ　オヤノゴーテイ　コゴンドー　フレガ　モーローガ　ソレイワ　アダン　シェバ　イェイダロウテ　ユト(こんど、くねくねと曲がりくねった管に、これに糸を通して持ってこい、という触れが回ると、また、それをもその親のもとへ、こんな触れが回ったが、それをはどうすればいいだろう、というと：民話・人捨て穴)

○アガカ　サケイ　ノマレ。(私がこそ酒を飲んだよ。)

○トシガ　アワズト　キガセー　アワバ　ソウテ　トシェイヨ　スレバ　ヨイ(年が合わなくても、気がさえ合うなら、つれ添って生活をすればよい：しょめ節)

３．おわりに　さいきん気になっていること

ムード表現の比較、東北山形・八丈・琉球西表、ベシ由来系を中心に

文献：

小林　隆 2004「金田章宏著『八丈方言動詞の基礎研究』」『日本語文法』4 巻 1 号 pp.149-158

金田章宏 2001『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院

金田章宏 2002「東国方言の文法と八丈方言」『国文学解釈と鑑賞』67 巻 11 月号 pp.94-104

金田章宏 2005「特殊な方言文法」『日本語学』24 巻 14 号 pp.44-54

金田章宏 2009「八丈方言にみる古典語文法“以前”」『国語と国文学』86 巻 11 号 pp.121-131

万葉集の表記や訓読は『新日本古典文学大系』(岩波書店)を使用した。

八丈方言の民話等については、http://www.akaneisc.com/　金田章宏研究室